



■創立50周年記念式典のようす

大正4(1915)年創部
全国2番目の歴史と伝統

桂倶楽部 100年

本市に本拠地を置く硬式野球チーム「桂倶楽部」は、本年100周年を迎えます。

桂倶楽部の創始者「奥源禄」の「野球で培われた健全な精神こそ郷土発展につながる最善の道」を部訓として、地域に根差した活動を続けてきました。

3月号に続き今回は、桂倶楽部の復興期をご紹介します。桂倶楽部100年のあゆみ“をたどりまします”。

【桂倶楽部復興期】

戦争が日本の敗戦という形で終結し、食糧難の時代から混乱と虚脱感が人々を支配していた時代にも桂倶楽部は古いクラブや傷だらけのバットを持ち寄り、谷村工商(現谷村工商)の校庭でボールを追ひ、野球を続けていました。

監督に灘谷満太郎が就任し、桂倶楽部の歴史の続きが始まりました。

昭和22(1947)年に、第18回都市対抗野球県大会で優勝し甲神静大会(山梨・神奈川・静岡)に出場しましたが、神奈川県地区代表であった「川崎トキコ」に惜敗し、本大会出場まであと一歩というところでした。

しかし、続く県下硬式野球大会、県営球場復旧記念大会では見事優勝しました。

また、軟式野球においても桂倶楽部のメンバーが中心になった谷村LCが軟式野球全国大会で準優勝するなど県内社会人野球での地位を確立しました。

桂倶楽部の活動に刺激され、谷村工商

(現谷村工商)は、いち早く野球部を再興し県予選・山静(山梨・静岡)予選を勝ち抜き、甲子園に初出場したのもこの年でした。

谷村工商の甲子園出場を機に谷村OBが続々と桂倶楽部に加え、チーム力はさらに高まり、昭和30(1955)年、第26回都市対抗野球山静大会においてノンプロ東芝富士を破るという快挙を成し遂げました。翌31年の第27回都市対抗山静大会にも出場しましたが、日本軽金属に敗れてしまいました。しかしこの大会で活躍した高村和夫選手が大昭和製紙の補強選手として推薦され、後に「たった一人の夢舞台」と形容された高村和夫選手の都市対抗野球本大会出場は、山梨県野球界初の快挙でした。

時代は、高度成長期に入り、大企業が次々と社会人野球に参画し、都市対抗本大会出場チームは、大企業チームが占め、地域のチームは、ますます埋没していきましました。

山梨県内においても戦前より存続していた商門(甲府商OB)・鶴城(甲府一高OB)などの各クラブは、昭和35(1961)年までに廃部となりましたが、戦後新たに甲府貯金局、富士急行(当時富士山麓鉄道)、関東電気工事など8チームの実業団チームを含む20チームが結成されましたが静岡県の大企業チームの壁に阻まれ、いずれも数年で姿を消しました。

しかし、そんな中でも桂倶楽部は、存続してきました。奥源禄部長、灘谷満太郎監督、選手一同が伝統を守り、山梨県の社会人野球の中心的存在であり続けました。

昭和40(1965)年には、創部50周年を迎え、これを機に闘将志村孝一(後の

市体育協会会長)が新監督に就任し、次の時代へのスタートを切りました。

翌41年、第37回都市対抗野球大会において山梨県を制し、二次予選山静大会に出場しました。主将城之内義昭の選手宣誓から始まった大会は、静岡の実業団4チーム(日本楽器、河合楽器、大昭和製紙、金指造船)と総当たりのリーグ戦を戦いましたが4戦全敗で創部50周年を飾ることができませんでした。

しかし奈良不二也の4割5分4厘という高打率が評価され、敢闘賞を受賞しました。山梨県の選手が個人賞を受賞したのは、大会史上初めてのことでした。

※灘谷満太郎：満州生まれで満鉄倶楽部から駿河銀行・大昭和製紙を経て奥源禄の勧めで昭和15年に谷村町に移り住み桂倶楽部に入部・谷村工商甲子園出場時の監督



■昭和41年 第37回都市対抗野球大会